

「信頼する者へ」

～人生はパラドックスである～

ローマ書9：30～33

鯛(イワシ)は字のごとく弱い魚です。船の生簀の中では生きることができません。しかし、生かす方法があります。同じ生簀の中にナマズ等敵を一緒に入れてあげることによって鯛は自分を守らないといけないので、一生懸命生きようとします。酸素が足りないとか、水温が高いとか、問題乗り越えて生き続けるのです。このことを覚えて時私達の人生はこのようなものです。この地において悪しき者が人間を誘惑して私達の人生が狂ってしまったわけでそんな人生に疑問を投げかけます。神様がいるならこの問題をとって解決してくれないのかと。しかし、それは私達が天国に帰るまでに救いを保つ為であるのが良く分かります。神様が造った被造物を見るときに私達のあり方を考えます。ストレスがないと人は生きることができません。元々はそんなふうには造られてはいませんが今日の私達は外的要因に影響を受けるときある人はそれで負けてしまいますし、ある人はその事を通して自らが正しく生きる決意をしています。ローマ書はそのような事をいつも確認するべきだと伝えてあります。

■ パラドックス①(30節)

パラドックスとは矛盾である。30節のみ言葉は矛盾から始まります。「では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。」義を追い求めた民が義を得ましたなら分かりますが、ところがこの文章は義を求めた人に義が与えられたと書かれています。信仰による義は行いや義を追い求めることによって得られるものではありません。日本は法治国家だからルールを守って生きています。ルールを守っていない事が悪だと思えますから守ってない人が悪とするわけです。すると結果人は悪に対して自ら義を行っている人を誇るわけです。あなたは義を追い求めてはいませんか？日本に生きていくと非常に厳しいです。義を追い求めてしまいます。自分は正しいと思っています。イスラエルの民は義を追い求めましたが義の律法を追い求めながらその律法に到達しなかったと書いています。正しい事を行えば義とされるという考え方を異邦人はもっていません。ユダヤ人は律法をもっていて規律があり規律を行えば義を得ると思っていました。義とは義認の事であり、正しいことを行えば義人だと自分かいうのではなく、義認とは誰かがあなたを義としますと言っています。それは裁判官のよう存在です。神との正しい関係に置かれることで初めて神様が義と認めると言っています。そして異邦人が義を得てしまいました。ユダヤ人は義を得ませんでした。今日まで義と認められていません。このままでは救われませんから彼らの為に祈らなければなりません。それは信仰によって得られると言っています。人は、信仰により、恵みによって、救われると書かれています。神が罪人を受け入れる方法は律法の行いではなく、正しい事を行えば救われるわけではありません。神はご自身と罪人との間に橋をかけた救いの道を用意されました。これが十字架です。人々はあちらの岸に渡る方法は持っていません。だから、イエスが十字架の橋をかけました。救いの道を信仰によって受け入れる事が義認の方法であります。救いの道が、そこに橋があると信じようとするのが信仰であると言っています。信仰とは信じることを迎え入れようとするということです。自らの心の中で自分は正しくないけど信じようとする心があれば義と認められると言っています。それは、行いによって達成することが出来ないからです。私達はルールを持っています。神様はカイザルの物はカイザルに返し、神の物は神に返せと言っています。私達の社会の中でそのルールを守るということは愛の為に必要です。しかし私達は自分が正しい者と伝える為にルールを守っています。だから、世界の国を見た時守っていない国に対してナンセンスだと思うのです。聖書は異邦人がルールがない人の方が救われていると矛盾を言っています。聖書が人々に律法を与えたのはあなたが律法を守ろうと努力する為でなく律法の中で罪人だと理解するためです。正しい事を行おうとしても正しいことなど出来ません。ローマ書にも書かれています。人は正しいと願うことができず、ことさらにしたくない事を尊んで行ってしまうのです。頭の中で正しい事をしてる事が正しいと思うことをやめなければいけません。クリスチャンは正しい事ができますが、正しい事をやろうとすることが間違っています。人は何かが出来て正しいから正しいのではなく、全てにおいて正しい人はいないからです。聖書は語っています。義人は一人もいないと。お互いに間違っていること認め合いそれぞれ間違っているところは違わずから、一つ体として補って一つになった時に正しい部分だけが練り合わされて素晴らしくイエスの花嫁になるのが聖書の信仰です。岩の上には教会を立てると言ったのです。あなたはペテロです。あなたは石です。小さな石である私達が罪人だと理解した人達が岩盤のように合わさった時にあなたの中に残されている98%の素晴らしさが大きな岩盤になり、ハデスの門も打ち勝つことが出来ないと言ったのです。皆がいて初めて正義になるのです。だから神様は一人の者を失ってはならないと言ったのです。この世界は誰かが犠牲になればいいのですが、しかし、聖書の世界は誰かを犠牲にするのではなくイエス様自らが犠牲になりました。この恵みをよく理解してください。

■ パラドックス②(31節)

異邦人の場合と対照的です。ルールを追い求めてみたのですが、人間は誰かに律法を求めようとした時自分の律法を犯すのです。自分の

正義の為に相手の事を罰するという仕組みがパリサイ人だと言っておりその行為は自分が正しいと思っているのです。私達は誰かを裁く悪魔なのです。何故なら、神になろうとしているからです。悪魔は元々存在しませんでした。天使が神になろうとしたからそれが悪魔なのです。神様が不従順である人間を愛して、尊んで、そんなルールを守らない人間を愛している行為に対して彼は怒ったのです。人間のスキヤンダルにつまずいたのです。イエスの時代のユダヤ人彼らが行ったのは口伝律法(タルムート)です。口から口へと伝えられました。パウロもパリサイ人の一人として律法に熱心でした。律法というルールは破りませんでした。伝承が伝わり、本質が無くなってズレてしまい、これが罪だと言っています。聖書が伝えたいのはルールではなく愛です。殺してはならない、何故なら愛だからです。盗んではならない、何故かという愛だからです。私のほかに神があつてはならない、何故かという神と人間が愛し合っているからです。あなたの父と母を敬え、両親と子どもは愛し合うべきだからです。イエスキリストは言いました。心を尽くし、知力を尽くし、思いを尽くし、あなたの神である主を愛しあなた自身を愛するようにあなたに隣人を愛しなさい。これが律法です。律法というのは愛が分かれば行おうとします。愛じゃないとルールになってしまいます。律法は人間に解決を与えません。法律はあなたに罪人だと教えるためです。私達は自分を愛するために相手のものを盗んでいいます。それが人間で強盗です。法律は相手を裁くためではなく自分が相手の為にどの様に生きるかの為にあるブレーキなのです。パリサイ人やユダヤ人は相手を裁く為に律法を使い聖書からズレました。

■ 2つの石(32～33節)

もうすでに予言されていました。キリストが生まれる何百年も前からイザヤを通してイスラエルの民はつまずくと書いています。「つまずく」と訳されたギリシャ語は「スカンダロス」(「スキヤンダル」の語源)です。そして「つまずきの石」とはイエスキリストです。なぜ、つまずくのか？それは私達が探しているのはイエスキリストではなくスキヤンダルだからです。イエスキリストを見ないでスキヤンダルを探しているのです。これがつまずきです。キリストの人生が彼らにとって怒りであり、呪いであり欺きあり、偽りであり、裁きの対象になりその言葉が英語になりスキヤンダルになりました。ユダヤ人にとってキリストの存在がスキヤンダルだったのです。ルールとは違ったのです。私達はルールに生きる事ではなく絶えず見出さなくてはならないのは愛です。ルールを守っていない人を裁く行為ではなくその人を愛して恵みに戻してあげることです。ズレた人を戻すのはキリストの愛で十字架です。その愛を知った人は本当にその犠牲を喜んで自らを罪人だと理解します。結果シオンに置かれた石は礎となったのです。「礎」はイエスキリストの別の呼称です。その意味は、試みを経た石、堅く据えられた礎、尊いかしら石というような意味があります。イエス様を見ず、人の問題を見、スキヤンダルを探す視線からイエス様を目標に向けた時、イエス様の存在が「つまずきの石」ではなく「礎の石」だということがわかります。

■ 信仰は罪を示し結果誠実の実を結ぶ

私達が律法に生きるなら自らが滅びます。真実に生きるということとはプライドが覆います。頑固に頑なにできてしまいます。あなたにはプライドがありませんか？プライドは人から指摘された時に簡単にはかれます。「あなたは間違っている」と言われると間違っていると思えるでしょうか。神様の前では素直に罪を認められても、人前では素直になれないことはありませんか？私達は不誠実です。つまずきは避けられない。つまずきを与える世は忌むべきものだ。しかし、つまずかない者は幸いである。と書いています。神様はつまずくことも、つまずきを与える事も、つまずいてしまう人も恵みからされていると言われます。全ての人が愛を保とうとすれば問題は無いのです。クリスチャン同士が争う事もなく、クリスチャンが職場に行けば奇跡が起きます。信仰は罪を示し結果、誠実の実を生み出します。私達が神様に信頼して前に出ようとする時必ず実が結びます。落ち葉拾いの人も種を蒔く人も信仰によって生きたわけです。荒れ果てた地に種を蒔いて大地は必ず実を生じさせてくれると信じたのです。貧しい人も収穫の中から、落ちた穂を食べたのです。信頼したので。だから、失望させられなかったのです。聖書は絶えず信頼という愛によって関係が結ばれています。信頼に失望してはなりません。あなたの人生からルールを取って神様を信頼して誠実の実を实らせていきましょう！

(要約者:富岡 美千男)

(2019年9月8日)